

山口大学医学部&附属病院から笑顔と情報を発信!

# 山/大/医/学/部

Yamaguchi University Faculty of Medicine and Health Sciences / Yamaguchi University Hospital

# 病/院/だ/よ/り

8

2023

Vol.261



「高齢者がん治療センター」開設記念

市民公開講座

『進行がんが治癒する時代』



## 理念・基本方針を刷新しました

### 理念

## 一人ひとりの健康と安心の探求と実現

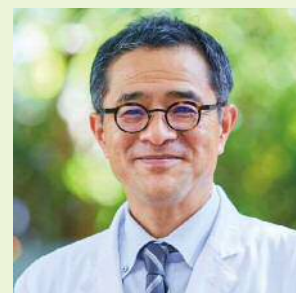
患者さんに寄り添い  
安全で良質な医療を  
提供する

個性や価値観を  
尊重し、安心して  
能力を発揮できる  
職場環境を創る

持続可能な地域医療の  
実現に貢献する

豊かな人間性を持ち、  
多様な場で活躍できる  
医療人を育成する

世界に誇れる  
先端医療を  
探求しつづける



2023年5月、病院の理念と基本方針を刷新しました。当院としては初の試みである、全職員の参加によるパブリックコメントでつくりあげた理念と基本方針です。新しくなった理念は一つ。基本方針は五つ。患者さん・職員・学生や若い医療従事者・未来・地域社会に対する、山口大学医学部附属病院や職員の使命・責任がこれらの基本方針に込められています。

山口大学医学部附属病院  
病院長

松永和人

「高齢者がん治療センター」開設記念講座

# 『進行がんが治癒する時代』

～高齢を理由に断らないがん治療を目指す～



令和5年6月1日(木) 山口大学医学部附属病院に、75歳以上の高齢者のがん治療に特化した「高齢者がん治療センター」を新設しました。このセンターでは、年齢を理由にがん治療を断るのではなく、多診療科・多部門が連携を強化し、手術、化学療法、放射線療法などを効果的に組み合わせた集学的治療を行います。

また、高齢者総合的機能評価 (Comprehensive Geriatric Assessment) などにより、認知機能や生活機能障害 (老年症候群)、社会状況などを包括的に評価し、抽出された問題点に対して、必要に応じてさらなるマネジメントを行い、患者さんが安心、快適な治療を受けられるよう支援します。

同センターの開設を記念し、6月28

日(水)、おのだサンパーク西館2階にて、市民公開講座を開催しました。新型コロナウイルス感染症の影響で、がん検診の受診率低下が問題になっている。今、がんに対する正しい知識と予防対策を学ぶ講座は、山口大学大学院医学系研究科消化器・腫瘍外科学 永野浩昭教授と、山口大学医学部附属病院腫瘍センター 井岡達也准教授による対談形

式で行われました。

公開講座はFMきららのパーソナリティ 岡崎美恵さんの進行で、時折冗談を交えながら和やかに行われ、約70名の参加者からは笑い声も聞かれました。高齢者のがん治療について楽しく学ぶことができた公開講座の様子はFMきららのサテライト生放送でも公開されました。その様子を紹介します。



参加者からは時折笑い声も。楽しく学べる市民公開講座開催





当日はがんに関する情報の展示コーナーも設置

入り口ではヤマミがお出迎え!

**岡崎さん(以下、岡崎)** まずは、主催者である山口大学医学部附属病院高齢者ががん治療センターについて教えてください。

**永野教授(以下、永野)** 山口大学医学部附属病院では令和5年6月1日に「高齢者がん治療センター」を新設しました。当院には最先端のがん治療を提供している「腫瘍センター」がありますが、高齢者がん治療センターはより高齢者に特化したセンターです。高齢を理由にがん治療を断らず、腫瘍センターや他科と連携を取りながら横断的ながん治療を行います。

世界保健機構(WHO)の定義では65歳以上が高齢者といわれていますが、山口県には70歳、80歳になっても元気な方が多くいらっしゃいます。内閣府総務省統計局の調査によると、山口県は全国で3番目に高齢化率が高い県だそうです。

**井岡准教授(以下、井岡)** WHOの定義とは異なりますが、当センターでは高齢者を75歳以上とし、どこまでき



山口大学大学院医学系研究科消化器・腫瘍外科学  
山口大学医学部附属病院高齢者がん治療センター長  
永野浩昭教授

んとがん治療ができるかということを考えています。もちろん、高齢者の全員ががん治療を受けられるわけではありません。ですが、「85歳だからがん治療はしなくてもいいでしょう」と、年齢を理由に医師から治療を断られることのないよう、当センターで対応していきます。

**岡崎** 都会では、年齢を理由にがん治療

を受けられないこともあるそうですね。

**永野** 都市部の病院は人口や症例数の多さから若年層を優先して診療する傾向があります。高齢のがん患者さんは治療を諦めていただいているのが現状です。

ところが、山口県には80歳以上でも元気な方が多い。そういった現状を踏まえると、山口県では年齢によるがん手術の制限をしないほうがいいのではないかと。元気な高齢者には最善のがん治療を行うのが、われわれ医療従事者の務めではないかと思いました。

**井岡** 当院では年齢を理由に通り返の判断をするのではなく、患者さん一人一人の体力や気力といった元気具合をきちんと確認しています。「85歳でもがん治療は可能」「75歳だが治療は難しい」など、個々に応じて判断する姿勢が大事だと思います。

**永野** 高齢者がん治療センターの目標の一つが「年齢だけで断らない」ということ。日本全体が高齢社会に向かっ

# 『進行がんが治癒する時代』

高齢を理由に断らないがん治療を目指す

高齢者がん治療センター  
開設記念講座

## 令和5年6月1日 新設 「高齢者がん治療センター」



山口大学医学部附属病院腫瘍センター  
高齢者がん治療センター副センター長  
井岡達也 准教授

ていく中、これからの日本の医療の在り方をどうするかは課題です。都市部で難しければ、元気な高齢者が多い山口県から最前線の高齢者がん治療の情報を発信するのも良いと思います。

医療では医師も患者さんもメデイカルスタッフも目指している方向は皆同じ。「病気を治す」ことです。われわれは皆で一つの集団なのです。

**井岡** 今は、都市部の医療機関が高齢者がん手術に対応していかなくても、超高齢社会になればおのずと85歳のがん手術に対応せざるを得なくなるでしょう。その時は当センターの事例が参考になるかもしれません。そのためには、

山口県から情報を発信する必要性があるのです。

**永野** がんといえば検診も大事です。山口県はがん検診の受診率が全国と比べてかなり低いのですが、高齢の方にも積極的にがん検診を受けていただきたい。がんが早期発見できるとご本人も元気でいられるし、田植えにも精が出せますから。

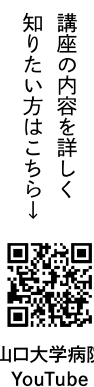
**井岡** 大腸がん検診と乳がん検診はぜひ受診していただきたいですね。これらのがんは進行すれば失うものが大きいですが、検査で発見しやすいです。大腸がん検診は、便検査より内視鏡検査が確実です。

ご家族が発がんした場合、がんに遺伝要因はありませんが、生活スタイルが似ているとじがんとを発症する可能性も考えられます。ですから、ご家族の発がん箇所の検診を受けるのも一つの方法です。当院の患者さんの中には、忙しさを理由に検診を受けなかった方がおられますが、がんになれば治療でさらに忙しくなってしまうのです。

ですから少し立ち止まって検診の必要性を考えていただきたい。友人や同級生の間で検診についてぜひ話題にしていただき、「皆で検診行つこうやあ!」と声をかけ合うことが非常に大事だと思います。

### 参加者の感想コメント

- ・高齢者でも治療をあきらめないことが大切なことだと思いました。(宇部市・70代)
- ・82歳以上でも元気なら手術をしていると聞いてうれしく思いました。元気でいられるようがんばります。(山陽小野田市・80代)
- ・80代ですが、安心して畑作業ができます。(山陽小野田市・80代)
- ・まずは検診が大事! すぐに行こうと思いました。(下関市・60代)



講座の内容を詳しく  
知りたい方はこちら↓  
山口大学病院  
YouTube

FMきららパーソナリティ

岡崎美恵さん



参加者は約70名  
皆さん熱心に聞き入っていました



## T 民生委員・児童委員を対象としたSDSゲートキーパー養成講座が行われました



令和5年5月19日(金)、宇部市文化会館にて宇部市民生児童委員協議会総会が行われました。その中で「さまざまな生きづらさとひきこもり～民生委員児童委員に望まれること～」としてSDS支援システム開発講座・山根俊恵教授による講演が行われました。

山口大学は宇部市と連携して地域の課題を解決するために、医学部に「SDS支援システム開発講座」を設置し、ひきこもりに関わる支援者の人材育成と支援体制の充実を図ってい

ます。その取組の一つとしてSDSゲートキーパー養成講座を開催しており、本講演もその一環として実施されました。SDSゲートキーパーとはSDSの当事者や家族に気づき、話を聴き、苦悩を理解し、適切な支援機関につなぎ、見守ることを役割とします。

参加者273名に向けて、SDSゲートキーパーとしての役割や在り方について解説され、支援として何が求められているのか熱心に耳を傾ける姿が見られました。

## T 再生医療と最先端リハビリテーションの統合による

### 革新的医療プロジェクトに山口大学医学部が参加



このたび、宇部市メディカルクリエイティブセンター(MCC)に拠点を設置する株式会社スペース・バイオ・ラボラトリーズと山口大学、医療法人和同会、UBE株式会社との連携・共同研究により、脳梗塞などによる神経損傷や運動機能障害の完治を目指す革新的な医療研究開発プロジェクトが宇部市で始まりました。

6月13日(火)宇部市役所で合同記者会見が行われ、篠田医学部長、高見教授、石原教授が出席しました。

本プロジェクトは、脳梗塞などで損傷した脳に対し、間葉系幹細胞の移植を行うことにより、損傷した神経を修復する「再生医療」と、本疾病により引き起こされた麻痺による歩行等の運動機能障害に対してロボットを活用する「最先端リハビリテーション」を組み合わせた、革新的な医療の提供に向けた研究開発に取り組んでいます。

山口大学医学部は、再生医療で使われる間葉系幹細胞の培養技術の研究と移植実施に向けた基礎・臨床研究の役割でプロジェクトに参加します。

くわしくは、宇部市成長産業推進協議会のホームページをご覧ください。



## Greeting

私は京都府北部で生まれ育ち、山口大学医学部に入学しました。平成6年に卒業し、山口大学医学部第三内科に入局すると同時に大学院へ入学しております。1年間、病棟での診療に従事した後に、スルフォニル尿素受容体の遺伝子変異の解析を行い、平成10年に医学博士を取得しました。学位取得後、国立山口病院ならびに山口大学医学部附属病院で糖尿病・内分泌疾患のみならず血液疾患の診療にも従事し、平成15年から3年間、カリフォルニア大学サンフランシスコ校(UCSF)に留学する機会をいただきました。帰国後、

令和5年6月1日付で病態制御内科学講座教授を拝命いたしました太田康晴(おおた・やすはる)と申します。着任にあたり、「山大学部・病院だより」をご覧の皆様にご挨拶申し上げます。



山口大学大学院 医学系研究科 病態制御内科学講座 教授

太田 康晴

教授就任のごあいさつ

病棟で指導医を務めた後、再び基礎研究を再開しました。谷澤前教授らが同定・発見された Wolfram 症候群の原因遺伝子である WFS1 の研究のサポートをしつつ、独自のアイデアに基づく研究テーマを模索し、体内時計(時計遺伝子)と糖尿病との関連性を解明するプロジェクトを立ち上げました。遺伝子改変マウスを用いた実験系などにより時計遺伝子の糖代謝における役割の一端を解明できたと考えております。現在は、そこから派生して、「代謝」という側面から臨床研究、基礎研究を展開していこうと考えております。当科の血液グループ、基礎講座、他の臨床講座とも連携を深め、そのつなぎ役になればと思っております。

私は、平成25年から8年間にわたって、医局長を務め、医学部附属病院を含め、山口県における糖尿病・内分泌疾患、血液疾患の診療を人面からも支えてきたと自負しております。今後は実臨床においても、医局を引っ張っていく存在になるべく、精進していく所存です。医学部、附属病院、そして山口県の医療施設がますます発展していけるように全力を尽くして参ります。何卒よろしくお願ひ申し上げます。

## T 医・薬学生共同多職種連携交流会が開催されました

令和5年6月25日(日)、山口大学医学部と山陽小野田市立山口東京理科大学薬学部は、令和6年度実施予定の「国内初の国立大学医学部と公立大学薬学部の共同による多職種連携教育」に向けて、医・薬学生共同多職種連携交流会を開催しました。

交流会には、山口大学医学部医学科3年生8名、保健学科看護学専攻2年生15名、保健学科検査技術科学専攻3年生8名、山陽小野田市立山口東京理科大学薬学部薬学科4年生28名の計59名の学生が参加し、8班のグループに分かれ、各テーマについてディスカッションし、発表を行いました。

班ごとのディスカッションでは、少子化対策や患者と医療従事者との対等な関係の構築、多職種医療連携による可能性や医療現場におけるAIの活用による多職種連携について、意見を出し合いました。学生からは、「それぞれの職種がどのようなことをしているのかを知ることができた」「他の学科の視



点を考えることが出来た」等の意見があり、次年度からの本格実施に向け両大学の連携を図るとともに、今後の学生交流に繋がる有意義な会となりました。

## 研究紹介



大津山賢一郎講師



常岡英弘特命教授

# 知っちょりますか？ 「猫ひっかき病」

犬や猫を飼っている家庭は多いですが、「猫ひっかき病」という病気があるのをご存じですか。知らない意外とこわい「猫ひっかき病」について、研究の第一人者である本学大学院医学系研究科保健学専攻病態検査学講座の常岡英弘特命教授と大津山賢一郎講師に聞きました。

### Q.猫ひっかき病とは？

バルトネラヘンセラという細菌がネコに感染し、そのネコが人を引っかけたり噛んだり、あるいはノミが媒介したりして、その細菌が人に感染してしまう病気です。まれにイヌを介して発症することもあります。したがって、猫ひっかき病は通称で、正しくはバルトネラヘンセラ感染症というほうがふさわしいかもしれません。

### Q.発症すると、どんな症状が出ますか？

人が感染すると、主に痛みを伴うリンパ節の腫れや発熱があります。また、まれにリンパ節の腫れを伴わない不明熱が数週間から数カ月続くこともあります。発熱は風邪と間違われやすいので注意が必要です。ほかに、目が見えづらくなる視神経網膜炎や、急性脳症、心内膜炎、肝脾肉芽腫(かんびにくげしゅ)など、さまざまな症状を発症します。



### Q.どういった人が発症しやすいですか？

子どもが多いですが成人も感染し、免疫力の低下した方は重症化しやすいです。

### Q.猫ひっかき病の判断基準は？

①ネコとの接触がある ②熱がある ③リンパ節の腫脹がある。  
この3つの条件がそろっていると、猫ひっかき病の可能性が高いです。

### Q.検査方法は？

本学は日本感染症学会・日本臨床微生物学会公認の先進的感染症検査44施設のうち、唯一猫ひっかき病の検査を行っています。検査方法は血液を採取し、蛍光顕微鏡を使って血清バルトネラヘンセラ抗体価を測定します。本学以外ではアメリカに検体を送って検査できますが、結果が出るのに1カ月以上かかります。本学では遅くとも1週間以内には結果を患者さんにお知らせできます。

### Q.感染を疑う場合、何科を受診すればよいですか？

小児は小児科、大人は内科を受診されるとよいと思います。目に症状が出ているなら、眼科を受診しましょう。問診では、「ネコに接触し

た」あるいは「動物に接触した」と医師や看護師に伝えてください。そうすると猫ひっかき病の可能性を推察しやすくなります。

### Q.治療法はありますか？

抗生物質を使って治療しますが、細菌は細胞の中に入り込むため即効性が弱く、時間をかけて改善に向かいます。ただし、一般的に広く使用されている化膿止め(抗生物質)では効果がなく、細胞内に移行性の良い一部の抗生剤が有効です。

### Q.人から人へ感染しますか？

これまでのところ、それは報告されていません。ネコの唾液やノミを媒介して感染するので、人から人への可能性はかなり低いと思います。

### Q.対策はありますか？

対策としてはノミの駆除が有効ですが、飼われている方が普段から気を付けていても、ノミの駆除が十分でないネコが多いのも現状と思われるので本学では予防対策の一助として、ネコに対するワクチンの研究を進めているところです。

日本はネコを飼っている家庭が非常に多いですが、まずは「猫ひっかき病」という感染症があることを知っていただきたい。そして、原因不明の熱が続く場合は、受診の際に「動物との接触あり」と伝えてください。「隠れ猫ひっかき病」で苦しい思いをされないように願っています。

現在は、飼いネコの感染を知るための手軽な抗原・抗体測定キットの開発を目指しています。「ネコを飼うのがこわい」と皆さんが不安にならないよう、ネコと安心して暮らせる社会をつくっていきたいと思います。

## ご寄附のお願い

「猫ひっかき病」のネコ検査キットおよびワクチン開発のため、ご寄附をお願いしております。皆さまからの温かいご支援をお願い申し上げます。

### 寄附に関するお問い合わせ

国立大学法人山口大学  
医学部経営企画課予算管理係  
TEL0836-22-2023  
E-Mail me212@yamaguchi-u.ac.jp



公式FacebookとInstagramで  
山大医学部・病院の情報を発信中



Facebook



Instagram

インスタ始めました!

企画発行 | 山口大学医学部広報委員会 / 山口大学医学部総務課広報・国際係  
〒755-8505 山口県宇部市南小串一丁目1番1号 TEL 0836-22-2111  
医学部 <https://www.yamaguchi-u.ac.jp/med/>  
附属病院 <http://www.hosp.yamaguchi-u.ac.jp/>